



第 3 0 号

令和3年 12 月 16 日

岩手県長寿社会課

フクロウは、地域の暮らしを支える希望の星になるか 花巻市小山田「おっほ」の巻

令和3年5月、花巻市小山田地区に「小山田スーパーおっほ」が開店しました。地区唯一のスーパー閉店を受け、買い物に不便を感じる高齢者などの支援のため、**地区の有志が協議会を立ち上げた**このお店には、生活支援体制づくりのヒントがたくさん含まれています。

今回は、開店から約半年を経たお店を取材。開店や運営の苦労と喜び、今後の展開について御紹介します。

ますます厳しくなる高齢者の移動や買い物

全国で2番目、北海道の次に広い県土を有する岩手県。かつて、高齢化率が今より格段に低い時代、鉱山や山林などの事業が盛んで、かなりの山奥にも多くの人々が住み、バスなどの公共交通網も各地に張り巡らされていました。「よろず屋／なんでも屋さん」のような、小さいけれどいろいろな品を売るお店の前には、地元の子もたちが駄菓子やラムネ、アイスを求めてたむろする…**最低限の買い物に困らない時代**がありました。



その後、人口減や少子高齢化により、こうした光景は次第に消えていきます。それでも、住民の多くは車を運転できたので、高くて品揃えが今ひとつの地元のお店がなくなっても、多少遠くのスーパーに行くことくらい、何ら苦になりません。いつでもどこでも自由に車で行けるため、**公共交通の利用者は激減**し、次第に減便・廃止の一途をたどっていきます。



しかし現在、団塊の世代が後期高齢者となり、体力や認知機能の衰えから、**運転免許を返納**することも珍しくありません。買い物や通院の際、同居家族や近隣の親族などが車で送ってくれる御家庭もありますが、一方で、身寄りのないひとり暮らしや高齢夫婦のみの世帯、バス停までの距離が遠い世帯なども多く、**「運転に不安があるが免許は手放せない」**高齢者も少なくありません。

近年、**ご近所の助け合い**による、買い物や通院などの「**移動支援**」が注目されています。住民ボランティアが、自家用車や公用車などを用い、高齢者からの依頼に応じて送迎を行うもので、全国各地に多くの事例が生まれています。

一方、地区内に住民有志がお店を新たに開き、高齢者の買い物の便を図るところも出てきました。今回のおはなしは、スーパーが撤退した地区で**高齢者たちがお店を立ち上げた**、そんな「**逆転のものがたり**」です。

地区のスーパーがなくなる！

令和2年9月、花巻市東和町の小山田地区に、衝撃が走りました。地区唯一のスーパー「Aコープ小山田店」が閉店するとの一報が流れたためです。

小山田地区の中心は、旧東和町の中心部から北に約5kmの、起伏のある田園地帯。車であれば10分もかからずに、大型スーパーやコンビニが建ち並ぶ国道283号に出ることができます。ところが、車のない世帯や独居の高齢者などにとっては、中心部への移動手段が限られ、Aコープがなくなると日々の買い物が難しくなります。

地区の有志は、後の店舗運営組織の母体となる「Aコープ小山田店閉店後について検討するグループ」を立ち上げ、年末に地区の全世帯を対象にアンケートを行いました。

その結果、閉店で「困る」との回答が回答者の63.8%、「お店がほしい」との回答が60.0%に達しました。また、「あったら良いと思うサービス」として、買い物支援と交通支援が約7割、食事の宅配、見守り、サロンの設置も約3割から回答がありました。

しかし、「お店がほしい」という回答が多くを占めたとしても、実際にお店を開けるのか、商売として成り立つのかは、全く別の話です。実際、Aコープから遠い集落などからは、反対の声も少なくなかったといいます。開店するには、場所や備品の確保、商品の仕入れ、広告、人手の確保、資金繰り…、さまざまな準備が必要です。これらをどう乗り越えていったのか、開店に駆り立てた原動力は何だったのか？ 早速聞いてみましょう。

ねほい はほい その1 インタビュー

今号のインタビューその1では、「小山田スーパーおっほ」を立ち上げた、小山田ふるさと協議会の吉田正志会長（右）、吉田千代子副会長（中）、下坂誓子店長（左）から、開店前後の苦労話をじっくりと伺いました。



—まず、開店のきっかけについて、買い物支援では、近郊のスーパーへの送迎を行う場合が多いと思いますが、「あえて」お店を開店した理由はなんですか？

地区の全世帯にアンケートを行ったところ、高齢者を中心に6割が「閉店は困る」「お店がほしい」と回答しました。特に、ここは小山田の中心で、「お店がないと地区が廃れる」「この場にあるからこそいつでも安

心して来ることができる」という危機感が強かったのが、開店の動機です。

小山田地区は広く、店から遠い地区では反対の声もありましたが、「発信場所があったほうがいい」という声もあり、店舗だけでなく高齢者の居場所づくり、生活支援のニーズも高いことが分かりましたので、交流拠点として地域の理解を得ながら、有志が中心となって開店することにしました。

——有志の方のパワフルな動きがキーのようですね。地区にはどんな人材が揃っていたのでしょうか？

当初から開店業務の中心になった有志は9名で、代表（吉田正志さん）は農協の理事、下坂店長はJA女性部長でもあります。有志の中には、コンビニの経営や道の駅の運営の経験者もおります。この事業は、中山間地域等直接支払交付金の「集落機能強化加算」があって成り立っていますが、事務手続は事務処理に詳しい地域在住の公務員などがサポートしてくれています。

——店舗の運営には、さまざまなリスクが想定されますが、どのような課題があり、どうクリアしていかれたのでしょうか？

運営組織を4月に立ち上げてから、約1ヶ月（※5月3日）で開店したため、田植えなどの農作業もあってかなり忙しかったです。店舗経営の経験者などのアドバイスを受けて準備を進めました。

財源となる中山間交付金を活用するには、地域内の集落協定組合と契約を結ぶ必要がありますが、地域内に11ある組合の理解を得ることが必要でした。結果、まずは3協定組合が趣旨に賛同していただきました、今後参加組合数を増やしていく予定です。

——改装や仕入れ、レジなど必要な備品購入、広告など、さまざまな費用がかかりますね。交付金もすぐには入金されませんが、資金繰りはどうされたのでしょうか？

店舗は、最初はAコープの建物を再利用しようかと思いましたが、老朽化がひどくて断念しました。隣にあるJA小山田支店の建物は、建ってからあまり使われないうちにJA合併で閉鎖されて、20年近く使

われていませんでしたが、状態がよく改装の必要がなかったため、活用することにしました。商品棚やレジなどの備品も、Aコープの中古品を活用しています。

仕入れは、地元のオリオンパンはここまで配送してくれますが、他はロットが小さすぎて配送されないため、市内の卸業者やスーパーに行って仕入れています。希望があれば取り寄せも可能です。このような形のため、販売による収益はあまり見込めませんね。

さしあたっての運転資金として、協議会の構成員が一人当たり5～10万円を出して準備しました。年明けには交付金の契約を済ませて活用したいと考えています。

広告は、地域の皆さんに「おっほ」のことを知ってもらおうと、月に1回「おっほ通信」を500部発行し、市の広報と合わせて配布しています。印刷は総合支所の機械をお借りしていて、支所の方から「毎月がんばってますね」と声を掛けられます。

——お店の名前は、どのように決めたのですか？ロゴもきれいですよね。

公募によって決めました。20以上の案の中から選考会で決定しています。「おっほ」（フクロウ）は市の鳥でもあり、響きがよく気に入っています。「フクロウのように地域の人の暮らしを見守り、未永く親しまれるお店にしたい」という意味を込めています。

ちなみに、店のロゴマークは、小山田在住の漫画家、パウロタスクさん（「農家メシ！」（幻冬舎）作者）に描いていただきました。

（後半に続く）

豊富な品揃えのお店

令和3年5月3日、旧JAいわて花巻小山田支所跡の建物内に、「小山田スーパーおっほ」が開店しました。開店のための運営組織を立ち上げてからわずか1ヶ月、農作業との両立や備品、商品の調達など、さまざまな苦労を経ての船出です。

開店セレモニーは、上田東一花巻市長と伊藤清孝 JA いわて花巻代表理事組合長も出席し祝辞を述べたほか、開店を待ち望んだ多くの住民で賑わったとのこと。



開店から約半年を経た11月11日、現地取材しました。最近のお店の状況はどんな感じでしょうか。

県道に面した看板に導かれ、駐車場に曲がると、「**オススメ！超目玉**」を書いた黒板がまず目に入ります。リンゴなどの果物や地元産の新鮮な野菜、新米のほか、おにぎりや惣菜など、**コンパクトな店舗に幅広い品揃え**が自慢です。



下には「**あったかい笑顔 いかがですか**」との一言も。下坂店長によると、お店のモットーは「**会話ができて明るく楽しく買い物できること**」と「**農作業の格好のままでも入ることができること**」の2点とのこと。



お店に入ると、**リンゴの甘い香り**に迎われました。右手には地元の野菜コーナーがあり、春にはここに山菜が、夏にはきのこが置かれていました。

季節に合わせた品揃えに力を入れており、地元の野菜、きのこなどの品数が多いことから、**産直と違って立ち寄る人も**いるほどです。

最近、開店直後の賑わいは落ち着き、1日30人を超えるくらいの利用とのこと。主な利用者は地元の高齢者ですが、**若い世代の利用も**少なくなく、取材日にも地元の子供たちが買い物に来ていました。





農産品以外の品揃えは、開店直後よりもますます充実しています。利用者の意見を踏まえ、品数を増やしており、夏はアイスや飲み物など、遠くに買いに行きにくいものがよく売れたといえます。お酒を扱うかどうかは検討中とのこと。

横の冷蔵庫を開けてみると、分厚い牛肉などがゴロゴロと。卵にパン、お菓자에惣菜、調味料などたいていのものはここで揃います。

楽しいお店にしようとの工夫は他にも。東側の壁には「写真展」のコーナーがあり、地域の美しい風景や子どものほのぼのとした写真などが飾られています。

これらの作品を撮影したのは、「日報キャビネコンテンツ」上位常連で、地元東和在住の合沢悦子さん。それにしても、地元には多彩な人材が揃っていますねえ。



課題と今後の動き

外からは順風満帆に見える「おっほ」も、人手不足が課題です。平日のレジ当番は、パートさんを1人雇って対応していますが、土曜日は協議会の役員が交替で対応しています。農繁期は本業の水田や繁殖牛の仕事と重なり、家族の理解があって何とか両立できているといいます。

お客さんからは「この通りには何もないので、お店があってよかった」「地域にお店があると安心する」と、評判は上々。最初は様子見だった人たちも、次第に協力してくれるようになったそうです。

こうした反応に、吉田会長や下坂店長は「大変なことも多かったが、お店の運営は楽しい」と前向きに受け止め、よりよいお店にするよう日々取り組んでいます。

お店の開設は最初の一步。今後、地区で小規模なサロンを開設したいとの構想があるようです。インタビューの後半では、今後の構想を伺いました。



——協議会では、地域住民が交流できるサロンの開設などをお考えとのこと。今後の構想を教えてください。

地区から歩いて通える、小さなサロンを試行的にやってみたいと思っています。まずは頭の体操として、市内で取り組まれている「元気でまっせ体操」にも使われる脳トレを取り入れてみたいです。

コロナ禍で、人と話をする機会が減ったからなのか、おっほに買い物に来て30分以上話し込んでいくお年寄りも少なくありません。

また、前回のアンケートでは、地区内で除雪やごみ出し、病院への送迎などのニーズが明らかになりましたので、令和6年度までに生活支援の取組を始めたいと考えています。

——県内各地には、お店や交通手段がなく買い物に困っている地域がたくさんあります。そういう地域の方に向けて、メッセージをお願いします。

まだ取組を始めて日が浅いので、いろいろな地域のお話を聞いてみたいです。小山田は中山間地域の交付金を使って業務を進めています。大変ですが、お店を開いてから多くの人との交流が進み、明るい光が見えてきたように思います。積極的に取り組んでいけばきっといいことがある。「田舎」も決して捨てたものではない。地域の住みやすさは、人とのつながりを大事にすることだと思っています。

——長いお時間、お話を聞かせていただきありがとうございました。

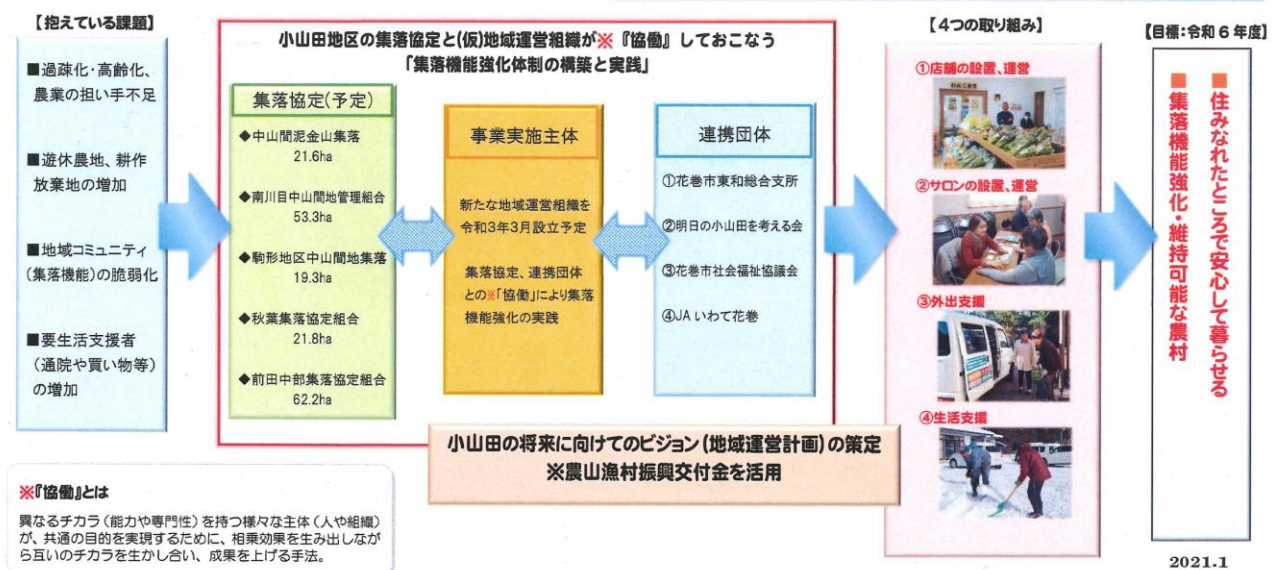
「中山間地域等直接支払制度・第5期対策」における 東和町小山田「集落機能強化加算」の取組み(案) (令和3年度～6年度)

■経過

- 令和2年9月25日、地区唯一のスーパー「Aコープ小山田店」が閉店
- 日常的に買い物をしてきた約50人が買い物難民に
- 土沢にあるスーパーまでは5km以上
- 閉店後、地区有志で検討会を立ち上げて話し合い、アンケート実施

■「Aコープ小山田店」閉店にともなう住民アンケート調査結果から抜粋
(期間：令和2年12月～令和3年1月)

- 435世帯中235世帯から回答(回収率54.0%)
- 店舗が閉店して困っている 150人(63.8%)
- 今後、店舗は必要 141人(60.0%)
- 店舗以外にあったら良いと思うサービス(回答の多い順)
買い物支援、交通支援、食事宅配、高齢者の見守り、サロンの設置、地域食堂…
- ※外出支援や生活支援への要望が多く出された



ねほい
はほい

インタビュー

その2

今号のインタビューは、特別に2本体制でお送りします。その2では、花巻市の伊藤東和地域支援監、長寿福祉課の久保田課長補佐、郡司主査、渡邊SCから、市の支援体制について伺いました。



—まず、花巻市の生活支援サービスの現状と課題を教えてください。

市内では「**ご近所サポーター事業**」を11団体が実施していて、掃除やごみ出し、除雪などの生活支援を行っています。特に昨年は雪が多かったので、除雪の依頼が多かったです。最近、免許返納者が増えたので、通院や買い物などの移動支援のニーズも増えています。

実施地区にはまだ偏りがありますが、地区の課題はさまざま。生活支援はあくまで一つの手段ですので、未実施のところでも、他の手法も含め何らかの解決が図られればよしとしています。

総合事業で実施する場合は、団体に「**地域で行う生活支援ガイドライン**」を配布して、必要な事務手続などを詳細に解説しています。

—SC（生活支援コーディネーター）はどのように活動されていますか？

市のSCは現在1名です。社協の福祉懇談会やサロンなどに参加して、困りごとを聞くなどしています。最近、実質的に2層SCのような活動をしている**社協のCSWとの連携を強化**し、2層の動きを1層に反映させたいと考えています。

—小山田地区の取組について、市ではどのように相談に応じてきましたか？

地域のパイプ役である東和総合支所が主に相談を受け、必要に応じて本庁の担当課につないでいます。最初は主に農政関係で、中山間交付金の使い方や手続、スーパーの運営方法に関する相談があって、本庁と連携して対応してきました。最近、サロンの運営について相談があり、長寿福祉課との**新たな庁内連携**につながりました。

—市では、小山田地区の取組をどう受け止め、どう生かしていきたいですか？

小山田の取組は、**外へアピールして周囲を活性化していく発信力**がすごいです。女性の力も強く、やる気と人とネットワークのバランスがいいですね。

他の地区が同じことをするのは無理でも、**地区の良さを知り広げていく力強さはぜひ見習ってほしい**です。

方針や手法がしっかりしているので、市が前面に立ちすぎると、逆に地区の良さが失われるのではないかと思います。サロンや介護予防、移動支援の観点から、自主的な取組を側面から応援していきたいです。

—お忙しいところ、ありがとうございました。

地域資源や財源は、福祉系だけとは限らない

花巻市小山田の「おっほ」の取組を振り返ると、スーパーがなくなり、高齢者などの買い物弱者をどうするかという大きな課題に地域が直面する中で、

- ① 地域住民が「このままでは地区が廃れる」という強い問題意識を持ったこと
- ② 課題解決のため、多様な経験や技能を持つ地域住民が自主的に協力し合ったこと
- ③ 事業を実施可能な財源や、手頃な物件を確保できたこと

の3点が、地域にお店を開く後押しになったポイントと思われます。



地域ケア会議などでは、地域の困りごとは数多くピックアップされても、解決を担う人材が見つからない、事業を推進するための財源が確保できない、といった話題がよく出てきます。

今回御紹介した事例では、農林水産省の「[中山間地域等直接支払制度](#)」が活用されています。この交付金は、山村や過疎地域等で農地に傾斜があるなど、農業生産条件の不利な中山間地域等において、集落等を単位に、農用地を維持・管理していくための取り決め（協定）を締結し、それにしたがって農業生産活動等を行う場合、面積に応じて一定額が交付されるものです。

交付金は、協定参加者の話し合いで、協定に定めた幅広い用途に活用できます。第5期対策（令和2～6年度）からは、「[集落機能強化加算](#)」の制度が新設されました。この加算は、新たな人材の確保や、営農以外の[集落機能強化](#)の取組が対象であり、[高齢者の見守り](#)、[送迎](#)、[買い物支援](#)などにも活用することができると例示されています。中山間地の多い本県では、活用の余地が大きい財源といえます。

一方、市街地の場合は、空き店舗を活用し、生活支援の拠点や高齢者の居場所を設ける事例もあります。建物を最小限の改装で使うことができ、商店街などが、賑わいをもたらす効果を期待して、寄付金や中古備品を出してくれることもあるようです。改装資金や備品等の初期費用は、空き店舗対策の各種補助や、厚生労働省の「[高齢者生きがい活動促進事業](#)」（上限100万円）などを活用することもできます。

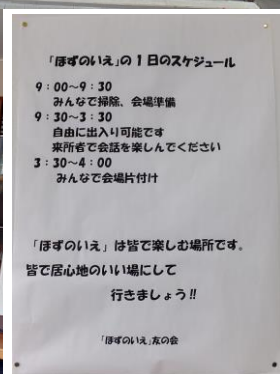
担い手となる人材についても、普段付き合いのある介護・福祉関係の方々や社会福祉法人だけでなく、農業関係団体や商店街、地元企業など、地域づくりや社会貢献に関心のある団体に協力を求めるのも一つの方法でしょう。これらはまさに、[地域を知る生活支援コーディネーターの腕の見せどころ](#)ではないでしょうか。

「生活支援コーディネーター現地研修」 in 九戸 開催

各地の生活支援コーディネーターが、現地で助け合い活動の実践やサービスの立ち上げ方などを学ぶ「生活支援コーディネーター現地研修」が、10月下旬から11月にかけて計3回、**九戸村「ほずのいえ」**で開催されました。当初は同一内容の研修を2回行う予定でしたが、申込が多く、3回目を追加した**人気の研修**です。



「ほずのいえ」は、**空き店舗を活用**してこの9月に開所したばかりの、**高齢者等の「居場所」**。**週3回**（原則は月水金。7のつく「市日」には調整）開かれ、**高齢者の語り合いや趣味の創作活動**などに、自由に活用されています。



ここは、生活支援の**有償ボランティアの拠点**を兼ねています。困ったときに「**すけでけろ**」（**手伝って**）と気軽に頼める「**ご近所すけっ隊**」が、ガラスふきやごみ出し、話し相手など、さまざまな困りごとに対応しています。



研修当日は、**晴山裕康九戸村長**から歓迎の御挨拶の後、九戸村保健福祉課の**下高山係長**と**河村主任保健師**から、取組状況について詳しくお話しいただきました。

平成29年から約5年にわたる「ご近所すけっ隊」（※協議体の愛称でもある。晴山村長も就任前は協議体メンバー）の立ち上げの歴史や、段階を踏んで協力者を増やし、「町の靴屋」が立派な拠点に生まれ変わるまでの**ドラマの数々は、涙なくして語れません**。ぜひ、直接御本人たちから聞いてみてください。その際、帰りに「**あま茶**」をお土産に買うのを忘れなく。



お二人の熱のこもった説明の後には、内部の見学や出席者による情報交換が行われ、予定時間を過ぎても話が尽きませんでした。11月16日開催の第3回では、東京からお越しになった「さわやか福祉財団」の鶴山理事から、温かいコメントをいただきました。



全国にその名がとどろく「**キングオブチキン**」（**オブチキ**）が君臨する、**キュート（九戸）な村のトリ組**、そのヒナがこの先どう育っていくのか、今後は楽しみです。

※ほず = 仏教用語で正気・理性の意。九戸地方でよく使われる言葉。酔って正気をなくすことを「**ほずなし**」という。

～編集後記～

こんばんは。取材班「ふ」です。本号で「**ちいきで包む**」がやっと30号に達しました。取材先や会議などの場で「**いつも読んでますよ**」という声を聞くことも多くなり、まずは皆様に感謝申し上げます。大谷選手の2021シーズン年間本塁打数には遠く及ばず、創刊からの8年間で紆余曲折もありましたが、ここまで続けているのはびっくりです。それにしても、ギリ番だとそれだけで妙な達成感が出るのはなぜでしょうか？

普段**とぼけた**文章を書く「ふ」ですが、取材に出るときはとても物静かで、インタビューで話が续かなくなってしまうことが多いのが悩みです。将来の取材先のみなさま、ある日突然「**取材に行きたいんですがー**」と声がかかっても、決して怖いことはありませんので、自然体で受け入れをお願いします。かばんと胃袋には常に**ゆとり**がありますが、「**山吹色のお菓子**」のようなお気遣いも無用でございます…。（取材班 ふ）

3人息子の父の「ゆ」です。転勤のため何度か転居を経験していますが、子どもが小さいので、車を使わなくても行ける距離にスーパーやドラッグストア等、生活必需品が購入できる場所があるかが、居住地を選定する重要な基準になっていました。今回ご紹介した「おっほ」の取組は、**スーパーがなければ自分たちで作ってしまおう**という、まさに逆転の発想。お店を開店するというのは簡単なことではないとは思っていますが、「**楽しさ**」を感じながら運営しているところが印象的ですし、その**柔軟な発想や意欲**、そして地域にある**人財や資源をフル活用**して実現しているところに感銘を受けました。

現代経営学の父と呼ばれているピーター・ドラッカーは、「われわれの事業を知るための第一歩は、「**顧客は誰か**」という問いを発することである」と述べていますが、「おっほ」は、事業を開始する前に地区の全世帯を対象にアンケートを取って地域のニーズを把握していますし、「**農作業の格好のままでも入ることができる**」というモットーを掲げていることから、顧客が誰かを明確にして経営されていることが伺えます。

「楽しさ」を感じながら、顧客目線で適切に運営していく。他の地域にも参考になるのはもちろんですが、私自身の仕事にも生かしたい視点です。（取材班 ゆ）

あなたの街の楽しい取組、教えてください！

「**ちいきで包む**」編集部では、地域の高齢者を支える楽しく一生懸命な取組を、もっともっと紹介したいと思います。面白い取組がありましたら、ぜひ下記までお寄せください。

「**ちいきで包む**」は、岩手県内市町村の高齢者に優しいまちづくりを支援するため、各地の特色ある取組や、関係する情報を発信する情報紙です。

企画・発行（問合せ先）

岩手県保健福祉部長寿社会課（本号担当：藤原・湯澤） 令和3年12月16日発行

TEL:019-629-5436 FAX:019-629-5439 E-mail:AD0005@pref.iwate.jp